

**「大分市子どもの読書活動推進計画（第四次）（案）」の市民意見公募に寄せられた
意見の要旨と本市の考え方**

	意見の要旨	市の考え方
第1章 4 計画の対象	<p>対象に妊婦を含めてもらいたい。</p> <p>赤ちゃんが生まれてからではお世話で忙しく、絵本の大切さを学ぼうとしてもなかなかできない。</p> <p>コロナ禍では母親教室の開催は特に注意が必要なので、様々なアドバイスを動画で配信してはどうか。複数回のシリーズにしたほうが浸透するのでは。</p> <p>冊子の配付だけでは、目を通すだけで、よく浸透せずにもったいない。</p>	<p>市民図書館では、赤ちゃんと絵本を読み合うことの大切さや、赤ちゃんと時間の共有に絵本や手あそびを楽しむことを伝える「赤ちゃんとえほんのじかん」を開催しております。</p> <p>対象は0～2歳くらいまでの子どもと保護者ですが、妊婦やそのご家族にも参加を呼びかけております。</p> <p>また、こどもルームは、妊婦やそのご家族も利用でき、指導員によるわらべうたや読み聞かせ会に、小さなお子さんのいるご家族と一緒に参加できます。</p> <p>今後は、時代に即した効果的な啓発方法についても視野に入れながら読書活動の推進に努めてまいります。</p>

	意見の要旨	市の考え方
第3章 4章 全体に関する事	<p>もう少し子どもたち自身が読書活動の推進に関われるような内容（例：子どもたちが書いた推薦文を図書館に掲示及び閲覧できるコーナーを設ける、図書館のホームページにブックレビューが書けるようなシステムをつくる、中高生が同じ本を読んで語り合うブッククラブを開設する）にしてはどうか。</p>	<p>現在、小中学生が読書活動の推進に関われるものとしていくつか取組を行っております。</p> <p>小中学校では、委員会活動において読書関連の行事（図書館まつりや読書週間等）を実施し、読書活動の推進を行っております。また、ブックトークやポップづくりなどの活動が国語の学習内容に組み込まれており、子どもが作ったポップ等を教室や学校図書館に掲示している学校もあります。</p> <p>市民図書館でも、中学生を対象に「ビブリオバトル大会」や「読み聞かせ講座」など、子どもが読書への関心をもつきっかけとなるような講座等を開催しております。</p> <p>今後も子どもの自主的な読書活動を重点方針に掲げ推進してまいります。</p>

	意見の要旨	市の考え方
<p>第3 〜 4章 全体に関する こと</p>	<p>赤ちゃんや小さい子どもの保護者が一番困っていることは、どうあやしたらいいのか、どう遊んであげたらいいのか、どう絵本を読んであげればいいのか、わからないことだと思う。忙しくてどうしようもない保護者にとって、スマートフォンの画面を見せてあやしている現実があるが、少しでもぬくもりを伝えてほしいし、成長を楽しんでほしい。まず親子の絆を深めるものとして、全世帯に最低限絵本がいきわたるよう「ブックスタート」をはじめてほしい。出生届を提出する際に、2〜3冊の本を市から贈ってほしい。</p>	<p>現在、全世帯に絵本を贈る「ブックスタート」は実施していませんが、その代わりとして、保健センターが行っている「こんにちは赤ちゃん訪問事業」において、生後4ヶ月までの赤ちゃんのいるすべての家庭に、保健師、助産師、看護師が訪問し、読み聞かせの方法や親子での読書の大切さについて伝えるとともに資料を配付しております。</p> <p>また、市民図書館において、「赤ちゃんといえほんのじかん」を開催し、絵本をつかったわらべうたや手あそび、読み聞かせ等を行っております。</p> <p>今後、少しでも多くの保護者に絵本を開く楽しい体験とともに、絵本を介したこころのふれあいのきっかけとなるよう、取組をすすめてまいります。</p>
	<p>核家族が大半になり、子育てをしている保護者は孤独になりがち。保護者に寄り添い、読み聞かせをサポートするアドバイザーが必要である。今は、オンラインビデオ通話、動画、ライブ配信も可能な時代なので、うまく利用すれば様々なことができるのではないか。</p>	<p>読み聞かせをサポートするものとして、読書支援ボランティアの養成や研修を、公民館や市民図書館等で実施し、子どもや保護者の読書支援に努めております。</p> <p>また、すべての関係機関において、本を通した絆づくりの重要性を、読み聞かせ会などを通して啓発しております。</p> <p>今後は、オンライン動画等、時代に即した効果的な啓発方法についても視野に入れながら読書活動の推進に努めてまいります。</p>
	<p>最近たくさん読めばいいというような風潮があり、小学生は読んだ冊数ばかり気にしたり競ったりしているような気がする。アンデルセンなどの名作を知らない中高生がいることに危機感を覚える。良書が「手に届く」「目につく」範囲に置かれるよう工夫すると読書の質が変わるのではないか。</p>	<p>読書習慣が身についたのかどうかは、本の冊数だけでは測れないと認識しております。実際、読書好きな子どもの中には、ページ数の多い厚い本を読んだり、心に残る名作を何度も読み返したりしている子どももいます。長年親しまれている名作と呼ばれるものや良書と言われる新刊など、子どもや保護者の「手に届く」「目につく」よう、読書環境の整備や、広報誌等での本の紹介を今後行ってまいります。</p>